

卵、肉、
堆肥を
自給する

庭先養鶏で自給率UP! /

ニワトリの恵み

自給的暮らしを目指すなら、ニワトリを飼わない手はない。毎日新鮮な卵が手に入るのはもちろん、
フンは良質の肥料になり、絞めれば肉になる。手軽に飼えて、役に立つ生き物ナンバーワン。茨城県筑波山麓で
自給的アウトドアライフを実践するフリーライター・和田義弥氏が、そんなニワトリのいる暮らしを紹介する。

Text/Yoshihiro Wada

春
に近所の養鶏農家から雌のニワトリを6羽もらつた。産卵率が落ちて処分する廃鶏で、その農家では年に数回、古参のニワトリとヒナを入れ替える。そのときに声をかけると譲ってもらえるのだ。

廃鶏といっても、それは養鶏を生業とした場合に、飼育コストの点でエコノミカルじゃないというだけ、孵化してからわずか2年程度でしかいない。ニワトリの寿命は平均10年ほどで、年とともに産卵数は少なくなるが、2~3歳なら2日に1個は卵を産む。我が家には、すでに雄1羽と雌7羽がいたので、これで14羽になつた。1日6~7個の卵が手に入る。ただ、以前からいるニワトリの中には、もうほとんど卵を産まないタダ飯食いもいるので、それは近々シメなくてはいけない。

今から11年前、東日本大震災で列島が大きく揺れる10日ほど前に、私はそれまで暮らしていた都心郊外の住宅地から茨城県筑波山麓の農村に移住した。住まいとなる古民家は、もともとちょっと傾いていたが、幸いにも地震による大きな被害はなく、私の田園生活は、まあまあ順調にスタートした。

2年後に5羽の廃鶏をもらってニワトリを飼い始めた。ボリスブラウンという種類

の茶色いニワトリで、農家では鶏舎の中を自由に歩き回らせる平飼いをしていた。ボリスブラウンは品種名ではない。アメリカの企業が育種した雑種(F1品種)で、正確には商品名だ。実用鶏やカモーシャル鶏とも言われる。

人はいる。河原をウマに乗って散歩しているのを見ると憧れるが、飼育場所やエサなどを考えると、安易には飼えない。その点、ニワトリはずっと飼いやすい。第1に飼育に場所をとらない。1坪の

小屋があれば10羽のニワトリが飼える。第2にコストがほとんどからない。導入は廃鶏をもらってもいいし、ヒナを飼っても数百円だ。エサは米ぬかやくず米などで自家配合できる。庭に放し飼いすれば、ミミズや小さな虫など自分でエサを見つけて食べるし、足で地面をひっかいてエサを探す習性があるので、雑草が生えにくくなるのもいい。エサと水をたっぷりやっておけば、数日家を留守にしても大丈夫だ。

それなんといてもニワトリは実用性が高い。毎日のように卵を産み、シメれば肉になる。フンは良質の肥料になり、それでオーガニックな野菜が育つ。有機物を循環させてくれるのだ。

和田義弥さん

1973年生まれ。フリーライター。茨城県筑波山麓の農村に暮らし、現在は約4反の田畠で自給用の米や野菜を栽培。犬、猫、ニワトリ、ヤギも飼育している。著書に「増補改訂版ニワトリと暮らす」(グラフィック社)、「菜園DIY入門」(地球丸)など多数。

コストがほとんどかからず、生産性は抜群



産卵性は
抜群で、日本
では最もメジャー
な採卵鶏の一種で

ある。気性も穏やかで人懐っこく、飼育しやすいことからペットショップでもよく売られている。

人が利用するために飼育する生き物を家畜や家禽という。代表的なのはウシやブタだが、個人でそれを飼っている人に出会ったことはない。近所にウマを飼っている。

二 ワトリを飼うことになったとき、まず小屋を建てた。地面に丸太の柱を埋めた掘つて小屋で、広さは畳一枚ほど(0.5坪)。ニワトリは寒さには比較的強いが、暑さは苦手なので、風通しをよくするために壁は設けず金網を張った。床は土の地面で、もみ殻を敷き詰めた。藁や落ち葉やおがくずでもいい。そうしておくとニワトリが足でひっかきまわして粪と混じり、床がコンクリート化するのだ。また、イタチなどの外敵が地面を掘つて侵入するのを防ぐため、小屋の周りには丸太やコンクリートブロックを埋めた。

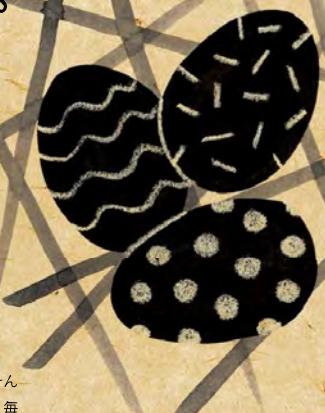
それから忘れちゃいけないのが産卵箱。ニワトリはうす暗い狭い場所に隠れるようにして卵を産む性質があるので、地面から約50cmの高さに幅、奥行き、高さがそれぞれ30cmの箱を3個設置した。産卵は午前中に行われる。産みたての卵を手に取ると、ニワトリの体温が残っていてホカホカと暖かい。そんな極めて新鮮な卵を食べられるのが、毎日のささやかな喜びだ。

その後、ニワトリが増え、今は新しく建てた1坪の小屋と数羽ずつ分けて飼っている。

ニワトリは雄がいなくても産卵する。なぜなら、それは人間の女性でいうところの生理と同じだから。産卵は産業ではなく排卵で、人間の女性が月周期なのに対し、ニワトリは日周期で多いときには24~25時間に1個の卵を産む。毎日卵を産んでいるニワトリは、日ごとに産卵時刻が遅くなり、夕方近くに産むようになると、1~3日休産し、また早朝から産むようになる。

産卵は日長にも影響を受ける。光でホルモンの分泌が促進され卵巣が発達するからだ。日が長い夏は毎日のように産卵するが、日長時間が短くなる秋から冬にかけては、ホルモンの関係で2~3ヶ月卵を産まない時期がある。そういうわけ

210日でピークを迎える、7~8年で産卵停止



-卵- Eggs

だから春から秋にかけての食卓は、卵料理のオンパレード。菓子作りが好きな妻は、プリンやシフォンケーキを焼くのに忙しい。客人へのお土産も卵。みんな喜んでくれる。しかし、秋が深まると食卓から卵料理は激減する。再び産卵箱に卵が産み落とされるのは立春の頃だ。

今、我が家には14羽のニワトリがいるが、

最初にもらった5羽はもういない。肉にして食べたのと、病気で死んだのと、野犬に襲われたものいる。その後、何回かの入れ替えがあって、今いるのは、廃鶏でもらったボリスブラウンが新旧合わせて8羽と、ホームセンターでヒナを買って育てたアロウカナと烏骨鶏が1羽ずつ。それから、卵から孵した雑種の雄が1羽と雌が3羽だ。最も若いのは雑種の雌で、昨春に烏骨鶏が抱卵して孵した。品種改良されたボリスブラウンは就巢性を消されているが、在来種である烏骨鶏はよく卵を抱くので、オスを飼って有精卵を産ませればヒナを自給できる。孵化したヒナは150日前後で卵を産み始め、最初の頃は2~3日に1個くらいだが、間もなく毎日のように産卵するようになり、210日前後でピークを迎える。以降は徐々に産卵数が落ちていき、7~8年で産卵停止。養鶏場では産卵数と飼育コストを坪にかけ、エコノミカルじゃなくなった時点で廃鶏となる。

産卵数は品種によっても異なる。ボリスブラウンはピーク時ならほぼ毎日のように卵を産むが、烏骨鶏は4~5日に1個程度だ。自家繁殖の雑種も特別産卵数が多いわけではない。卵殻の色や形も品種によって異なり、ボリスブラウンは赤玉といわれる茶色。烏骨鶏はサクラ色。アロウカナは淡いグリーンの珍しい色の卵を産む。

烏骨鶏が1週間前から産卵箱に入つて3個の卵を抱えている。エサを吃るときと水を飲むとき以外、そこを離れようとしない。抱卵を始めてからびったり21日でヒナが孵る。あと2週間だ。そしたら、わが家のニワトリは17羽。いよいよシメなくてはいけない。

Column I

ヒナを孵して育てるには

20羽の群れに雄1羽で約80%が有精卵になる。親鳥が抱卵すればヒナが孵るが、就巢性を持たない場合はふ卵器を使う。産卵した卵は、洗わずに常温で▼

